eye

田植えを継ぐ

屋号「津倉」の曽根武さん(右)と談笑する小佐田美佳さん。「津倉」さんは「俺らは米作りの技術と知恵があるから、体が動かなくなっても若い人に教えられる」

イベントの田植え前、苗を手に取り水洗いする屋号「津倉」の曽根イミ子さん。田植えが機械化され苗取りは約40年ぶりだが、美しさを感じる手際の良い所作が手に刻み込まれていた

伝統的な農法である枠転がしで棚田に田植えの準備をする「地域おこし協力隊員」の多田朋孔さん

夢を語る集落 新潟・池谷から

Iターンで移住する若者が増え、限界集落を脱した池谷(新潟県十日町市)。東日本大震災の翌日、震度6弱の地震に見舞われたが、割れた田んぼもなく無事に田植えの季節を迎えた。

しかしこの春、村で最年長の米の作り手の決断に集落が揺れた。「坂之上」の屋号で呼ばれる庭野昇一さん(78)が稲作をやめ、外部の農業法人に田んぼを貸した。

持病の脳梗塞の診断で、医者から重労働を止められた。70歳を超える作り手たちは庭野さんに「半世紀以上この地で続けてきた米作りをやめるなんて、お前は今どんな気持ちなんだ」。

4月に1年間の期限で池谷に移り住んだ小佐田美佳さん(25)は、村の人が動揺しているように感じた。「自分はこの村が好きで移住した。故郷のように思う村がなくなるとしたら寂しい」

京大を出て勤めていたコンサルタント会社を辞め、昨年2月に反対する妻と子と共に村での永住を決めた多田朋孔さん(33)は「若い移住者たちがまだスタート地点に立ったばかりで、後継という点では力不足の面があるかもしれない」。

就農するため池谷に移住した坂下可奈子さん(24)は、「橋場」の屋号で呼ばれる曽根藤一郎さん(75)の指導を受けながら、稲の苗箱を田んぼに並べて思った。「村の人たちはあと何回米を作れるだろうか」。集落の存続を思うと残された時間は少ない。「私は今、掛け替えのない時間を過ごしている」

写真・文 森田剛史

田植えイベントの交流会で「天神囃子(ばやし)」を歌う庭野昇一さん(中央)。右は多田朋孔さん

田植えを体験した後、棚田のあぜ道を歩く子供たち

地域おこし協力隊とは

総務省が09年度に始めた。人口減少や高齢化などの進行が著しい地方に、都市部の若者らを派遣し、定住・定着を図っていく取り組み。隊員は各市町村が募集し、1～3年間、農林漁業の応援、水源保全・監視活動、住民の生活支援などに従事する。

10年度は全国の自治体4県88市町村が実施し、257人が隊員として採用された。十日町市では現在、17人の隊員が地域おこしに取り組んでいる。同省は11年度までに全国で3000人規模にすることを目標にしている。市町村には隊員1人当たり年間約350万円が特別交付税として補助される。

地元ブランド米「山清水米」の直販などに携わってきた多田さんは現在、村を訪れるボランティアの受け入れ組織「十日町市地域おこし実行委員会」のNPO法人化を目指す。農業機械の共有化などを通して、移住者が村人から農業を受け継ぎ、定住できる仕組みを模索している。